

今日の福音書の中に『敵を愛し、』という言葉がありますが、皆さんの手にしておられる、A年ピンクの「日本聖公会特祷・聖餐式聖書日課」の顕現後第7主日の福音書の中に、44節の『しかし、わたしは、言うておく。』の次に『敵を愛し、』という言葉が抜け落ちていませんか？

この祈祷書ができてから27年ですが、顕現後の季節はイースターの日程で数が決まります。第7まであるのは珍しくて、しかもA年は3年に1度です。A年にこの箇所が読まれるのは、1990年の出版以来、6年前の2011年が初めてでした。宮崎の教会の聖書日課は、2007年発行されたものなので、出版するまで17年間読まれていませんでした。ですから、手書きで『敵を愛し、』と書き込みがされています。読まれることがなかったので、ミスプリントが発見されないのも仕方がないのでしょう。

しかし、「なんじの敵を愛せ」というのは、キリスト教のとても重要な言葉ですから、忘れてはいけないことです。そして、それに続けて、補足するような『迫害する者のために祈れ』という言葉は、とても困難な教えとして、私たちに迫ってきます。

でも、それをイエス様が実践された、という出来事を私たちは知っています。聖書のどこにそれが書かれているか、思い出せるでしょうか。

イエス様は、十字架に架けられた時に、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ23:34)と言われました。これが『敵を愛し、迫害する者のために祈れ』を実行された、典型的な例でしょう。そして、今日の福音書の最後には、『あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。』と、弟子たちに教えられました。そしてその通り、イエス様のように、敵を愛し、迫害する者のために祈ったのが、ステファノです。

使徒言行録は、ルカによる福音書の続編なので、両方の書物を書いたルカが、わざと似せたのかもしれませんが、ステファノは『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』(使徒言行録7:60)と祈っています。それでは、わたしたちも、その通りに生きられるでしょうか。

イエス様の十字架上の言葉が強烈なんですけど、私は実際にイエス様が弟子たちに教えられたことは、もっと身近な、やりにくい相手くらいのものではないかと、前後の福音書を読みながら感じています。

今日の福音書の後半、43節からをもう一度見てみましょう。ついでに、参考として今日はもう一枚、プリントを用意しました。これは、「ガリラヤのイエシュー」という本からの引用です。イエシューとは、イエス様のことです。イエス様は、ギリシャ語のイエススという名前を日本語風に表記したものです。しかし、ヘブライ語でイエス様は話していました。旧約聖書では、モーセの後継者であるヨシュアという人がいますが、イエス様の名前を旧約聖書の表現に合わせたら、ヨシュアなんです。しかし、それも日本語風に表現したのであって、本来の発音は、イエシューというのが、正しいのです。だから「ガリラヤのイエシュー」とは、「ガリラヤのイエス」という意味ですね。

東北のケセン語に聖書を訳したカトリックの山浦玄嗣（はるつぐ）というお医者さんが、いろんな方言を交えて、4つの福音書を訳し直しました。それ以上の説明は今はしません。あとで説明を読んでみてください。

わたしが、これから、この本の言葉を、43節から45節まで読んでみます。だいぶ、訳した人の信仰理解が込められているように思いますが、それがこの教えを知るカギになるように思うのです。

「(43) お前さんたちも聞いている通り、『身内、仲間を大事にしろ。敵（かたき）は憎め』と言われている。(44) 加えて、この俺は言うておく。敵（かたき）といえどもどこまでも大事にし続けろ。さらにはだ、自分をさいなむ者のために何かよいことをしてやりたいものですが、何をしてやったらよいでしょうかと、神様のお声に心の耳を澄まし続けろ。そうやって、天の父（とと）さまのいとし子になれ。

なんといったって父（とと）さまは、悪い人にも善い人にも隔てなく[命の芯まで干涸（ひから）びさせるジリジリとくそ暑い]太陽を昇らせ、掟を守る者にも守れない者にも隔てなく[シトシトと命を潤すやさしい恵みの]雨を降らせてくださるお方なのだ。」

たくさん気づきがあったと思います。

最初に驚いたのは、44節の初め「しかし」ではなく、「加えて」と訳していることです。私は、たくさん新約聖書の訳を見ましたが、この箇所を「しかし」英語の場合は「But」と訳しているものばかりで、このように「加えて」という言葉に訳しているものはありませんでした。

でも、ギリシャ語をしらべてみると、「de」という、不変詞と呼ばれる単語で、これは文章の最初には来ない単語です。三つの使い方があります。①前に書かれている文章に対して、反対の意味の内容を書く時の『しかし』という使い方や、②前の文章が否定的になっていることに対して、別のことを言うために『むしろ』こうだという『むしろ』という使い方をしたり、③同じようなことが書かれている場合に、その一つ一つを際立たせるために『また』とか『さらに』という使い方もする単語なんです。

ですから、前に書かれている命令よりも、さらに厳しい命令を私はします。と言っていると、この山浦さんは理解したのでしょうか。ちなみに、『身内、仲間を大事にしろ。』はいいですが、『敵を憎め』という教えは、旧約聖書には出てきません。むしろ『敵にも親切にしてください』という教えが出てきます。

出エジプト記23章です。

(12)敵対する者とのかわり

『4:あなたの敵の牛あるいはろばが迷っているのに出会ったならば、必ず彼のもとに連れ戻さなければならぬ。5:もし、あなたを憎む者のろばが荷物の下に倒れ伏しているのを見た場合、それを見捨てておいてはならない。必ず彼と共に助け起こさねばならない。』

ですから、「敵を愛する、敵に親切にする」というのは、イエス様に言われなくても、旧約聖書の中に、十分その教えが入っているのです。

ところが、イエス様の時代のユダヤ教には、外国人を軽く見たり、軽蔑したり、嫌う傾向があったので、教えられたのではないかと想像します。

そして、私が今回驚いたのは、「太陽を昇らせ」「雨を降らせる」神様への考え方でした。一年の内で、一番寒い時期を過ごしている私たちには、太陽の存在はありがたく、雨も同様な意味で、恵みとして使われていると思ったのですが、山浦さんは、わざわざ砂漠の中で生活しているイエス様たちの状況から推測して、「善人も悪人も、敵も私たち味方も、同様に、太陽の苦しみも、雨の喜びも味わっている。」と説明するのです。

敵の彼らも、あなたたちと同様に、神様の支配の下にいる、神様の子どもであることを自覚して、「敵であっても大事にし続けろ」という話なんですね。

そして、ついでに言うと、このあと「迫害する者のために祈れ」と言われたところを、「自分をさいなむ者、いじめたり、苦しめたりする者に、何かいいことをしてやりたいけど、何をしたらいいか、神様に聞く」というわけです。祈る、というのは、神様に向かってお願いの球を打ち込むように思いがちですが、これは逆に、相手の必要を神様に尋ねることが、お祈りだというわけですね。

上杉謙信が、武田信玄に塩を送ったような、そんなことを頭に描きます。

さて、現代において、やりにくい相手をどう考えるかということですが、私はある本を思い浮かべます。もう20年以上前に読んだ本ですが、犬養道子さんの著書「ヨーロッパの心」という、岩波の新書でした。

ボールを使うスポーツの多くはヨーロッパが発祥の地です。そして、ネット越しにボールが行ったり来たりするわけです。この場合、日本語では、対戦相手を「敵」と呼んでいます。英語では、決して、敵を表わす「enemies」は使いません。Opposite, opponent などの、反対側に向かい合う相手、みたいな意味があります。この形は、イギリスなどでは、国会の議会で議員たちの座る席の作り方にも表われています。与党と野党は、お互い向かい合うように座り、それぞれの代表が、テーブルを挟んで、意見を戦わせて、国の政策について、議論を深めるのですが、ジョークなどを入れて、議論を楽しんでいるわけです。スポーツと似ています。

この場合、相手を力づくで、ねじ伏せたい、というのではなく、より良いものを作り出すために、切磋琢磨するためのパートナーみたいな関係があるようなのです。

勿論聖書の方は、英語では、あなたの敵を愛しなさい (Love your enemies) ということになっています。そしてイエス様は、まさにそんな相手によって命を奪われたのですが、聖書の「天の父は」という視点から見る努力が必要なのではないでしょうか。それは、神様を、ちょうどネットの中央の高いところから見守っている審判のように考えるのです。その場合、審判は、どちらの選手にもエコヒイキせず、公平に裁くのです。

もうすぐ、大齋節が始まります。2週間後の、大齋節第1主日は、悪魔がイエス様を誘惑する話が読まれます。この悪魔ですが、そんな悪者と考えてしまっているのかどうか。「中傷する者」「誹謗する者」というのが悪魔という単語の別の意味ですが、これが、イエス様を試みたわけです。そしてその試みるは、「誘惑する」とも訳せるのですが、鍛える、ということにはならないか。

私たちが、苦手で、こんな人はいなかった方がいい、という相手を、敵と考えていいのでしょうか、その存在とのかかわりの中で、私たちはほんものの信仰へと、導かれているとすれば、それは貴重な私のパートナーということなのかもしれません。

トランプ大統領の登場で、私たちはアメリカという国の、全く今まで気付かなかった面を見せつけられて、戸惑っています。保守派は、あのようなことまで言うのか、と驚かされることが多いのですが、あえてその主張を聞く姿勢を持って見てはどうか。それによって、私たちは成長することがあるのではないか、と思っています。

今日は、聖書日課に抜けていた「敵を愛すること」について、考えてみました。